

ラマダンとレバラン

海外で仕事をする上で、その国の文化を知ることは非常に重要なポイントです。インドネシアの場合はイスラム文化を理解することが特に大切となります。6月号で「インドネシアのイスラム教」を取り上げましたが、今月はそのイスラムの習慣でも最も重要な「ラマダン」と「レバラン」がありましたので、少し詳しくご紹介します。

ラマダン (Ramadhan) とはイスラム暦の九番目の月を意味し、ムハンマドに最初の神の啓示が授けられた月であることから特に重要視されています。今年は7月20日～8月18日がそのラマダン月でした。ムスリム (イスラム教徒) は、それを忘れないためにこの1ヶ月間、毎日日の出から日没まで一切の飲食を断たなければなりません。ムスリムにとって、神への帰依を試される試練の一ヶ月なのです。富める者も貧しき者も同じ戒律を守り、断食 (プアサ=puasa) を行うことにより、貧困と餓えの苦痛を体感し、家族そろっての食事が何事にも代え難い喜びであり、神からの賜物であることを大切にす気持ちるを養います。断食は自己の修養と他人に対する寛大な態度を育成し、ムスリムの連帯意識を育みます。

ラマダン中は、夜明けまでに食事を済ませなければならないため、ムスリムの朝は早く、睡眠不足となり、日がたつと段々と人の顔も険しくなってくるのがわかります。ラマダンの間はなるべくややこしい問題提起を行わずに静かにしておくというのが非イスラム教徒のムスリムに対する思いやりです。ビジネスは通常通り行われますが、現実問題として能率が落ちることは避けられず、企業はそれに沿った生産計画や事業活動をせざるを得ません。断食が近代社会の生活リズムに馴染まないことも事実ですが、インドネシアで事業を行う上では受け入れていく必要があります。過去に遡れば、オランダとの独立戦争の際に共和国側が「ラマダン休戦」を呼びかけましたがオランダ側が無視した事により世界中のムスリムを憤激させ、大きなマイナスを負いました。異教徒がラマダンに乗じて何かを勝ち得てもこれには代償を覚悟しなければなりません。

また、今年はオリンピックの開催期間とラマダンがたまたま同じ期間に重なり、オリンピックか断食か、多くのムスリムの選手を悩ませました。インドネシア人ではありませんがサッカーの試合に断食をしながら臨んでいた選手もいました。それだけ断食はムスリムにとって大切な習慣で、世界に11億人のムスリムがいる中で、オリンピックでさえもこの習慣に配慮すべきだったという意見も出ています。

ラマダン断食月の最後の日にはマラム・タクビランといわれます。夕方になると人々は、料理や果物や飲み物を持参し、モスクや礼拝所に集まります。月を観測して「〇時〇分〇秒」と決められたラマダン明けの瞬間になると町中がどよめきます。時間にルーズなインドネシア人を思えば、奇妙な光景です。町はタクビール (神を讃える唱和) で沸き返り、ジャカルタのスナヤン広場などは人々で埋め尽くされ、タクビールの大合唱が数万人の規模で開かれます。

ラマダンが明けるとレバラン (Lebaran) です。レバランは苦しい断食をやり通した喜びの祝日で、ムスリムにとっては、“正月”のようなものです。公式にはイドゥル・フィトリ (Idul Fitri) ともいわれます。今年は8月19日と20日がレバランの祝日、17日の独立記念日と18日土曜日、そして21日と22日が有給休暇一斉消化日として連休になりました。都会で働く人々もこの年に一度のレバラン休暇を故郷で迎えるため帰郷します。このため鉄道、道路などの交通機関が大混雑となります。また例年、各交通機関がこの時期に値上げされますが、今年は労働省により、エコノミークラスに限り値上げの上限が3割までと定められました。

《帰省ラッシュの様子》



車の渋滞



バイクで帰省する人々



電車に乗り込む人の列



空港の出発カウンターの様子

今年約 1,599 万人が帰省すると運輸省が発表し、オートバイでの帰省者が前年比 6.6%増、自家用車での帰省が 5.4%増でした。二輪・四輪の驚異的な販売台数が注目を浴びているインドネシアですが、ここにもその影響が表れています。もちろんこの時期に多くの日本人駐在員もお休みを取り日本へ帰国するのが一般的です。帰郷者が再び都会へ戻り、日常生活が元に戻るまで 10 日から 2 週間ほどかかります。

レバラン当日は特にきれいに装ってモスクに集まります。また、親戚、友人を訪問してお祝いの挨拶を交わします。挨拶の言葉「Ma'af Lahir Batin」は「私のすべての過ちを許してください」という意味で、目上の人に許しを請う挨拶です。子は親に、使用人は主人に許しを請います。この「ハラルビハラル」と呼ばれる行為は「一年間の過ちはすべてご破算になる」という重宝なシステムです。

レバランはムスリムにとって、まるで生まれたばかりの赤ちゃんのような清らかな祝日です。ラマダン中に断食・ザカート（喜捨）などの善行を果たし、それが明けた後にお互いの過ちを許し合うことによって、聖なる精神の向上を目指しています。偉い人の家もこの日ばかりはオープン・ハウスになり、大勢の人が押し掛けて食事がふるまわれますが、もちろん“お酒”はありません。その他にレバランカードという日本でいう年賀状のようなものを送る習慣や、お年玉を子供たちに配る習慣もあります。



親戚中が集まり、目上の人に許しを請う挨拶を行う

日本ではまだまだイスラム文化についての理解は高いとは言えず、逆に誤解をされているような方もいらっしゃると思います。しかし、インドネシアのムスリムは“スジャトラ（豊かさや平穏）”が高まることを願い、このような習慣に従っているのです。

以上

<これまでの岡山県インドネシアビジネスサポートデスクレポートは[こちら](#)から>

★岡山県インドネシアビジネスサポートデスク（PT. JC内）概要★

所在地：WISMA NUSANTARA BUILDING 24th Floor

Jl. M. H Thamrin Kav 59 Jakarta Pusat Indonesia 10350

デスク担当者：PT.JC 武井 和宏（たけい かずひろ）

対象エリア：インドネシア全域

※「岡山県インドネシアビジネスサポートデスク」では、岡山県内に事業所を有する企業や経済団体等のインドネシアでの事業展開を支援しています（岡山県から[公益社団法人 日本インドネシア経済協力事業協会](#)に業務を委託）。ご利用に当たっては、「[岡山県インドネシアビジネスサポートデスク](#)」[利用の手引き](#)をご覧ください。岡山県産業企画課マーケティング推進室（電話 086-226-7365）までご相談ください。

※本レポートは岡山県内企業のインドネシアでの事業展開の一助とするため作成されたものであり、サポート対象に該当しない個別のお問い合わせには対応していません。